

間宮林太郎が、遊齋の住む鯉長屋にやってきたのは、昨日のことであった。屋過ぎに顔を出した土平から、遊齋が、報告を受けている時である。

「色々ね、新しいことを聞き込んできましたぜ——」

土平は、長い脚を胡座に組んで、大きな左手で、軽く頬を叩いた。

講釈師が、張り扇で釈台を叩くように、土平はそれで、しゃべりの間をとっているらしい。何でしょう——

とは、声に出さずに、遊齋は眼で問うた。

「三年前に亡くなった、源治郎ですが、実は死んだあたり屋のおかみ、お妙さんの子じゃあなかつたんで——」

「それは、知りませんでしたね」

「でしよう」

嬉しそうに、土平がうなづく。

知らなかったという遊齋の言葉で、土平の口調に勢いがついた。

「ありた屋仁左衛門の、最初の女房であるおそのつてえ女が、二十八年前の春に産んだのが、源治郎で——」

土平の左手が、ぴしやりと自分の頬を打つ。

「まあ、源治郎を産んだこの年の十一月に、産後の肥立ちが悪かったようで、このおそのが亡くなって、死んだお妙さんてえのは、その二年後——つまり、二十六年前に仁左衛門が、後添えのちぞとして一緒になった女なんでき」

「で——」

「お妙さんが、仁左衛門と一緒にってから、二年後に産まれたのが、進三郎しんざぶろうってえわけで……」

源治郎と進三郎、ようするに腹違いだったってえことです——
このように、土平は言った。

源治郎は、三年前、二十六歳で亡くなっている。

この時、四歳違いの進三郎が二十二歳。

「それが、今回のことと何か……」

「それは、まだわからねえ。関係があるかもしれねえ、ないかもしれねえ。もう少しあたっちゃあ、みますがね」

「ふうん……」

遊齋が、何か思うことがあるのか、小首を傾かしけてみせてから、

「それで？」

土平に問う。

「もうひとつは、犬神法のほうで……」

「どうでした？」

「犬神法、こいつは、上方かみがたの方でやられる法で、この江戸で、それができる者っていうとそうはおりません」

「でしようね」

「まず、眼めの前にひとり——」

「眼の前？ わたしですか——」

「まあ、先生のお名前をはずすわけにはいかんでしよう」

「わたしは、何もしてませんよ」

「もちろんでさあ——」

「まだ、他にも、いるでしよう」

「おがや拜み屋の多々羅陣外」

「げんとくじ玄德寺の伝祥和尚——」

「かづまれいめい式王子を操る、鹿妻零明——」

三人の名前をあげてから、

「しかし、この多々羅陣内と伝祥和尚は、まず、これはやらんでしよう」

土平は言った。

「でしようね。いずれも名前のあるお方ですから——」

「あやしいのは、鹿妻零明ですが、零明は、一年ちよつと前から、上方の方へ行ってるってえこととで、江戸にやあおりません。まあ、この三人は、はずしてもいいんじゃないかと——」

「すると、他には……」

「播磨法師」

土平は、きつぱりとその名を口にした。

「やはり、その名が出ましたか」

「しかし、今、どこにいるのかわかりません。遊齋先生なら、ご存じじゃあねえかと——」

「さて、どこでしょう」

「あの人は、得体が知れねえ。齢もわからねえ、名前もわからねえ。どこにいるんだかいねえんだか……」

「どこでしょうかねえ」

「あたしだって、その顔を拝んだのは、三度あるかどうか。口を利いたのは一度ぎり。その面ア見るのは、地獄へ続く井戸の蓋ア開けて、中を覗き込んだみてえで、それだけで、背中の毛がそけ立っちゃまった……」

「わたしも、何度も会ったわけではありませんよ」

播磨法師——

わかっているのは、播磨の出であるというそれだけ。

土平の言うように、名もわからず、年齢もわからない。

ただ、えらい年寄りだということはわかっている。

肌が黒く、皺が深い。

顔がくしゃくしゃとされていて、揉んで捨てた紙のようであり、口と皺の区別がつかない。しゃべるか笑うかしてはじめて、その口のありかが知れる。

その皺の中で、眼だけが、生もののようにぬれぬれと黄色く光っている。生きながら、妖怪と化したようなものである。

「あたしは、あいつが、千年生きていたとしても、嘘だとは思いませんよ」
そう言って、土平にしては珍らしく、その巨体を、ぶるりと震わせた。

「あの方は、住む場所を持ちませんからねえ……」
遊齋がつぶやく。

「この方面は、もう少し、あたってみます。何か、出てくるかもしれねえ」
土平がそう言った時、戸をほとほと叩く者があつて、

「どうぞ」

と、遊齋が声をかけると、

「お邪魔いたしますよ」

という声と共に、戸が開いて、間宮林太郎が入ってきたのである。

(十九)

「もう、土平さんもおそろいでしたか——」

そう言いながら、林太郎は、角の生えたされこうべ、積みあげられた書を脇へのけて畳の面を空けて、そこへ座した。

「もう、いらっしやる頃だと思っていましたよ」

遊齋は言った。

「では、用件の方も、もう見当がおつきですか？」

「二日前に、近々ゆくと文をいただきました。ありた屋のお内儀と、進三郎が亡くなった件でしよう」

「いや、その通りです」

林太郎がうなづく。

眼鼻だちがくつきりとしていて、絵にしやすい顔だ。

座した背が、真面目そうに、まっすぐに伸びている。

「だいたいのところは、ご存じとあらば、話は早い。お妙と進三郎の死に方についても、おわかりということでしょう」

「あたしが、あの時、ちょうど御殿山ごてんやまに居合わせましたものですから、勝手に、少し動いておりました。今も、ちょうど、その話をしていたところで——」

土平が、びしゃり、と頬を叩く。

「進三郎の死体を、二日前、見てまいりました——」

林太郎が言う。

「どうでした？」

「いや、もう、ひからびて、人の身体からだがこんなになっちまうもんかと……」

頭の中に浮かんだ映像を、振りはらうように、林太郎は首を振った。

「ひと目見て、これはもう、わたしたちのあつかうものではないと思ひまして、こうして足を運

んできたのです」

「ありた屋のお内儀が亡くなった時に、おいでになるかと思つたのですが、少し、遅うござりましたね」

遊齋が言う。

「そつちの方は、話だけで、死体の方は見ておりませんでしたので。ありた屋の方で、何か隠しごとでもあつて、そんな話をでっちあげているのかと考える者もおりましたので……」

「でも、ちょうどよかつた……」

「何がです？」

「いえね、あたしらが勝手に、ありた屋に行つて、色々訊ねまわるわけにもいきませんからね——」

土平が、また頬を叩く。

「しかし、間宮さんが出ばつてきたということは、これで、お上の御用になる。ありた屋に足を運ぶことができるつてえもんです——」

土平はそう言つて、これまで、あつたことを、おおまかに林太郎に語つて聞かせた。

「なるほど、さむらい憑きということですか——」

林太郎は、話を聞き終え、そう言つてから、

「それならば、こたびの一件、遊齋先生にお出ましましたくということ、お願いいたします」
両膝に両手をのせて、頭を下げた。

「ならば、ちょうどいい。明日、一緒に出かけましょう」

遊齋が言う。

「どちらへ」

「如月右近先生のところですよ」

「右近先生ですか？」

「もしかしたら、ちょっと腕のたつお方がひとり、必要になるかもしれませんので……」

遊齋は、そう言って、静かに微笑したのであった。

(つづく)